

作成：岩崎純一

新水無瀬恋十五首歌合（しんみなせこいじゅうごしゅうたあわせ）

平成二十三年（2011）二月五日～十三日に催された。建仁二年（1202）に後鳥羽院が水無瀬の離宮で開催した水無瀬恋十五首歌合になっている。

■歌題

春恋 夏恋 秋恋 冬恋 暁恋 暮恋 鞆中恋 山家恋 故郷恋 旅泊恋 関路恋 海辺恋 河辺恋 寄雨恋 寄風恋

■作者

袴ちの子
青柳香織
岩崎純一（[作者サイト](#)）

■判者

戸井留子（歌の右の漢数字が五点満点中の点数）

■春恋

袴ちの子

枕濃くさむしろうすき若草のむら残る雪のあとも消えつつ 二

（枕や莖にところどころ濃く薄く残っております女の私の冬の涙のあとも、春が来て消えかかっています。）

青柳香織

うぐひすのむかしの春も忘れて朧月夜に花をしくかな 三

（うぐいすの鳴いていたようにあなたと楽しく過ごした昔の春ももう忘れられて、朧月夜に敷くのは、あなたとの寝床ではなく、桜の花でございます。）

岩崎純一

春霞それと見し日の面影もあらしののちの玉ゆらの花 五

（春霞のうちにあの人かと思つたその日の面影も今はなく、それは嵐の吹いたのちに散り残つたむなしい花のように、はかない思い出でございます。）

【判】

三首とも趣はとても美しいものです。「若草のむら残る雪のあと」、「うぐひすのむかしの春」、「それと見し日の面影もあらし（有らじ）」、いずれも十分な趣でしょう。ただし、とりわけ「玉ゆらの花」の歌が勝っております。一首目には、言葉がこなれない点がございませぬ。「枕濃く」は聞きませぬ。判はご覧のとおりでございませぬ。

■夏恋

袴ちの子

袖も恋もなほもひとへに夏は来し花散里のあとのにほひに 三

（あなたと別れた私の袖は一重になり、それでもひとえに恋をしたまま夏が来ませぬ。匂い立つ花の散ったあとの人里の寂しい景色に。）

青柳香織

忘れめや忘れかたみの花かたまとまらぬ夏のぬぎし衣に 四

（忘れるでしょうか。忘れがたいことです。あなたと一緒に摘んだ花の入った花かごは、あなたとの忘れ形見となりました。私の肩身にとどまらず、ぬげ落ちませぬ夏の着物に。）

岩崎純一

移り香の夜半ぞひとへに思ひいづる青葉重なるつらきけしきに 三

（お互いの移り香の残る夜、着物が一重になりました私は、ひとえにあなたを思い出してませぬ。春の花のような夜が終わり、夏の青葉ばかりが重なるつらい景色を前にして。）

【判】

甲乙つけがたい歌のよい例でございませぬ。私には「花かたみ」と「青葉重なる」の歌が少し優れていると思われませぬが、いかがでしょうか。ただし、下句だけを見ませぬと、「青葉重なる」は、「花散里のあとのにほひ」に及びませぬ。二首目は、「花筐」と「肩身」の流れなど、特に批判するところがございませぬ。

■秋恋

袴ちの子

秋の床まことの恋はあらねども蛍ゆゆしき面影の月 三

（あなたに飽きられた私の寝床には、本当の恋はもうございませぬけれど、夏の蛍のゆゆ

しき光の思い出される月が出て、床の上に照り、それがあなたの面影のようです。)

青柳香織

黒髪に秋来る夜半のその先に人の袖吹く風にならばや 三

(私の黒髪に、あの人の飽きに来るような秋の夜が来たなら、私のほうが先に、あの人への思い出に飽きて袖に吹いていく風になりたい。)

岩崎純一

忘れめや我が袖よりも朝露のたまらで枯れし月草の花 三

(忘れるでしょうか。忘れません。朝露が少したまっただけで枯れてしまった月草の花を。その朝露よりも多い私の袖の涙と、涙よりも浅いあなたの心が思い出されますから。月草の花のような私の恋は枯れたのです。)

【判】

一首目は、馬内侍の「飛ぶ螢」を連想させて、美しいものです。「夏の螢」を詠んだことは、本歌の連想のことがございますから、あまり問わないことにいたしましょう。二首目は、上品な情趣よりは、少女のような心を選んだのでしょうか。ただし、言葉遣いに難が見られませんのは、この一首でございます。三首目、「我が袖よりも朝露のたまらで」の着想に心打たれます。あるいはこれは、「浅い朝露の重さにも負けて枯れた月草の花の前に、深い涙の私はいつそう枯れざるをえない」心でもありましょう。

■冬恋

袴ちの子

いくとせの雪をわが身にたとへきぬ恋ふりし袖は色も残らず 二

(何年間の雪の白さを私の身にたとえてきたことでしょうか。雪が降るとともに、し尽くした恋の袖には、色気も残らず、ただ白一色だけになりました。)

青柳香織

逢ふことは恋に恋してうたた寝の枕の夢の霜枯れの花 三

(あなたにお逢いすることは、恋に恋したまもうたた寝をする枕の上にて夢の中だけで見る霜枯れの花のように、叶わないことでございます。)

岩崎純一

常永久にむすぶちぎりもこぼれつつやがて氷の道の菅の根 四

(末長くと結んだ約束も破れ、私の涙もこぼれて、そのまま氷になり、その氷の張った道に生えた菅の根だけが長く続いております。)

【判】

一首目、美しゅうございますものの、紅色の涙との対比として女の肌の自賛を感じさせて、野暮の色が少々ございます。二首目、「霜枯れの花」に唐突な感がありますが、難なしとの意見多く、よしとします。三首目、「こぼれつつやがてこほり」は、品ある言葉に値するでしょう。

■ 暁恋

袴ちの子

秋の色そればかり空にほの見えて袖にくまなき有明の月 四

(私への飽きの色。そればかりが空の有明の月の中に垣間見えて、私の袖の月は涙でくまない。)

青柳香織

別れには月と袖にてわかたばやむなしき恋の有明の空 四

(恋人との別れ時には、月と袖とで分かち合いたい。むなしい恋を映す有明の空を。)

岩崎純一

有明のかた敷く色を面影に知らぬ今はの心をぞ聞く 三

(明け方の月の色をあの人々の面影として寝床に敷き、今はどうなっているかも知らない、いいえ、きっと終わりを迎えたでしょう私への恋心を聞いています。)

【判】

「色を面影に心をぞ聞く」とは妖艶な共感覚ですが、ここは一首・二首目の、「有明の月」について批判の余地のない情趣をとることにいたしましょう。

■ 暮恋

袴ちの子

夕庭にほのかたらひし面影はむかしの夢に暮れし花かな 三

(夕暮れの庭で恋を約束したあなたの面影は、ずっと昔に見た夢の中の夕暮れに咲くだけ

の花でした。)

青柳香織

夕菜さへしをれし恋の人のためつみにつみても夢の夢かな 二

(夕暮れに摘む若菜までもしおれたように、すでにしおれた恋の相手であるあなたのためにいくら摘んでも、夢のまた夢です。)

岩崎純一

上の空雲のひとへに重ねきて恋や初瀬のよその鐘の音 五

(私の心はうわのそら。私の袖が一重になったのに合わせるように、初瀬山の雲も薄い一層ほどです。私の恋が果てたのをよそに、鐘の音が世の恋人たちの逢瀬を告げています。)

【判】

ほとんど迷いなく「恋や初瀬のよその鐘の音」に優をつけるべきでしょう。「夕庭」、「夕菜」と詠んだのよりも、ずっと哀婉な「恋の夕暮れ」を感じさせます。美しい悲恋の歌のよい例でございます。

■ 鞆中恋

袴ちの子

むかし見しをばなたづねてたびまくら女波さびしきよるの涙に 五

(昔見た、すすきの花のように印象的なあなたを探して旅寝をしています。すすきの花に打ち寄せる小さな波のように、今宵も涙を流しながら。)

青柳香織

思ひ人たびぢなかばにかかるとななびく心と髪待つ夜に 三

(私の元に来てくれるあの方は、道半ばにさしかかったそうです。夜に心も髪もなびかせて待つ私の元に。)

岩崎純一

この旅路身のこがらしは埋め来し吹き返す袖に月を連ねて 四

(この旅路には、木枯らしが吹き埋められてきたとともに、恋に焦がした私の身も埋めてきました。吹き返す袖の涙に月を幾度も映して。)

【判】

いずれも趣高い歌ですが、ここは一首目を優にいたしたく思います。木枯らしとともに旅路に埋めてきた恋心よりも、すすきに寄る波の趣をとりましょう。二首目は、一つ言葉を誤ると、艶にすぎる色歌になりかねません。

■山家恋

袴ちの子

山ぎはは人の心をうつすらんかりほのひまに見ゆる薄雲 四

(山のあたりの空は、あの人の心を映しているのですね。山小屋の屋根のすき間から見える、薄い心のような薄雲が出ていますから。)

青柳香織

来ぬ人のことのなぐさに重ねてきかりほのそとの山鳥の声 三

(来ないあの人の、口先だけの恋の慰めに重ねてしまいました。山小屋の外のほうで聞こえる、山鳥の雄の翼のほろ打ちの音を。)

岩崎純一

海ならぬ里の我が身をいかに見るや松のうきねに峰の白雲 二

(海にはない里、つまり山里にある私の恋の身を、あの人はどのように見るのでしょうか。波に浮いた松の根のように、あの人を待つ憂き寝床を。今は、あの人にはもう会えない、あの人のことは知らない、と言わんばかりに、山の峰に白雲がかかっています。)

【判】

「山里」を「海ならぬ里」と言って、「松のうきね」を詠みこむとは、技巧的ではありますが、技巧的にすぎるでしょう。難しい歌になりすぎております。「かりほ」をそのまま読みこんだ残る二首をよしといたしましょう。

■故郷恋

袴ちの子

ふるさとや心の奥にかへす袖はわが身ひとつになける鈴虫 五

(私はふるさとに帰りました。心の奥に遠いあなたを思って涙を流す声は、私と同じように一匹だけで鳴いている鈴虫のようです。)

青柳香織

ふるさとのねおびれし床のひとり身はとほき思ひの松風の声 三

(ふるさとにて、夢から目覚めて横たわっているひとり身の私は、遠くのあなたに思いをめぐらせて、あなたを待っています。)

岩崎純一

いかにせん心づからのよその身は雪ふるさとに残る枕を 三

(どうしようもない。自分から君を残して出てきたのだから。雪の降る君のふるさとに残る二人の枕は、どうしようもない。)

【判】

「いかにせん」の歌は、殿方の心と見て翻訳をいたしました。どちらでもかまわないでしょう。あるいは、相別れた男女どちらの心でもあるでしょう。ただし、「雪ふるさとに残る枕」の言葉の艶に比べて、上句が難解にすぎます。二首目は、「ねおびれし」があまりに聞き慣れません。「鈴虫」が勝ってしかるべきでございます。

■旅泊恋

袴ちの子

窓見ゆる涙の月のくるしきよいくへにやどる水ぐきのあと 三

(窓から見える、涙に曇る月の苦しさよ。あなたに宛てる手紙の筆の跡に、涙が幾重にも重なります。)

青柳香織

ぬぎすべす先にさらえのゆらのとやとまらぬ衣の袖のみなとに 三

(由良の門を行く舟のように、着物を脱ぎ滑らせようとする前に滑り落ちてしまうほど体が震え、ゆらゆらと行方の知れない私の恋です。体にきちんととまらない着物のように、恋の成就という港に寄ることもなく、袖はとまらない涙に濡れています。)

岩崎純一

旅のけの庵の茅に風ふきて同じばかりの面影ぞ立つ 三

(仮小屋に、これまでの旅の日数ほどの多くの茅をふいて寝てみると、すきまから吹いてくる風に、また同じだけの夜の数を過ごしたあの女の面影が立ちのぼるのであった。)

【判】

一首目、「くるしさよ」と言い切りましたのは、効き目があります。二首目、「先にさらえのゆらのとやとまらぬ」のサ・ヤ・タ行音のうちに「ラ」音の美があるでしょう。「同じばかりの面影」の歌は、定家の「かきやりしその黒髪」の歌を思い起こさせる官能美で、妖しい光沢があります。

■関路恋

袴ちの子

忘られていかにつたへん逢坂のせきとめあへぬ袖のけしきを 三

(忘れられてしまった今、どのようにあなたに伝えましょう。逢坂の関のようにせき止めることのできない袖の涙の様子を。)

青柳香織

世の中は関なき道も心からかたみに露の別れあるとや 五

(男女の中というものは、それが関所のない道のように何のわだかまりのない恋路でありましても、涙に別れなければならないときがあるのでした。)

岩崎純一

もろともにふたたび須磨の袖へだて閉ざしかたしや関守の影 四

(もう二度と一緒に住むことのない二人は、須磨の関の番人に袖をへだてられ、恋をかたく閉ざされたような最後である。)

【判】

一首、三首目も、特に難はございません。しかし、ここは「関なき道」を詠んだ稀な情趣を勝ちといたしましょう。三首目、男女どちらが詠んだのでもなく、関守が詠んだのでもなく、三人を傍観して詠んだ点には、冷徹な美しさがあり、目を向けるべきでしょう。

■海辺恋

袴ちの子

うきまくら逢ふことなみのよるの袖にみをつくしてもみる目なきかな 四

(私は涙に浮いた枕に寝ています。あなたに逢うことのない中、波の寄るように濡れる夜の袖に、身を尽くしてあなたを思っても、海の藻が打ち寄せられないように、逢うすべもないことです。)

青柳香織

うつりゆく花は忘れんはまゆふの心の色を海にながして 五

(花のようにうつりゆくあなたのことは忘れましょう。浜木綿の葉のようにあなたと私とでへだたっている心の色を海に流して。)

岩崎純一

我が涙かけじかけても消えわびぬ忘れがたみの貝の下燃え 三

(私の涙は流しかけまいと思うけれど、そういうわけにはいかず、泣いてしまいます。そして、流しかけても、涙は消えないのです。その涙をかけても消えない、恋の火ですから。私は貝のように、あなたを忘れがたく、陰で泣くばかりです。)

【判】

言葉が優美であるのは、「心の色」の共感覚表現でありましょう。しかし、ほかの二首も優れています。一首目のミ音と三首目のカ音とは、心地よい響きを持っております。悩んだ末、「心の色」をとりましょう。

■河辺恋

袴ちの子

名取川いはせうつつの夢にまで見そめし人に恋を言はなな 四

(恋の浮き名を取るという名取川の岩瀬を流れ打つように、夢うつつに見た夢にまで出てきた、見染めてしまったあの人に、恋心を言いたいのです。)

青柳香織

わたらぬといひし人さへたのめつつ渡良瀬川の恋のながめは 四

(私のもとへ渡らないと言ったあの人のことまで、まだあてにさせてしまう川なのです。雨が降り続く中、渡良瀬川という名の川を眺めて過ごす恋なのですから。)

岩崎純一

つつみあへず衣の下行く水にほひ上毛にうつる花の濡れ色 二

(包むことができず着物の下を流れゆく涙の匂いと、黒髪に染み移ってゆく花のような濡れ色は、川の水の流れの匂いと、水に浮かぶ鳥の上毛の綺麗な色のようです。)

【判】

三首目、「下」と「上」、「水にほひ」と「濡れ色」は、漢詩の対句のように整っていて、なおかつ言葉の流れも美しいものですが、色歌の趣が濃い気もいたしますゆえ、あえてこの評といたします。この歌は、殿方が詠んだのでもなく、女自ら詠んだのでもなく、涙の河のほう人間を詠んだ冷え冷えとした官能美をたたえています。残る二首、名取川と渡良瀬川を詠みこみ、いずれもあわれがあります。「言はなな」は、和歌でも珍しい語形です。

■ 寄雨恋

袴ちの子

黒髪の上の空なるわが身よりたもにかかる夕やみの雨 四

(黒髪の上のほうの空から落ちてくるのかと思いましたが、心がうわのそらになっていまず私の身から流れ出た涙だったのですね。袂にかかる夕闇の雨とっていましたものは。)

青柳香織

もみぢふるくれなぬ色の雨しづくくもりし恋のかごとばかりに 四

(もみぢが降って雨の雫が紅色に染まるように、私の涙も少し血がにじんでいます。曇り空のようにあてのないこの恋を悲しむ私の、ほんの申しわけ程度に。)

岩崎純一

衣々の忘れがたみに重ねてし身を知る雨の帰るさの雲 五

(お互いに脱いで重ねていた着物を着て別れる後朝、忘れがたさの形見として、雨の降る中、悲しみの涙を流しましたね。あなたの帰り道の空にも、雲が幾重にも重なっていたのです。)

【判】

これら十五題のうちで一番の秀歌ぞろいではないでしょうか。「たもにかかる夕やみの雨」、「くもりし恋のかごとばかりに」、「身を知る雨の帰るさの雲」、いずれも流麗な哀調をたたえています。二首目、「申しわけ程度ではすまない」血の涙を詠んだ点、女の嫉妬心の絶唱という気がいたします。

■ 寄風恋

袴ちの子

面影をはらふ手だてはいたづらに風そふ雪もはやつもるなり 三

(あなたの面影を手で払う手だてもなく、払うのさえ無駄なことです。風が吹いているゆえに散るばかりで積もらないはずの雪も、もう積もってしまい、私の涙も、払う手だてもなく積もっていますから。)

青柳香織

かげろふのほの見えし日の春風にいとどゆれても消えぬ面影 三

(あの人の姿が陽炎のように垣間見えた日に吹いていたのと同じような春風に吹かれる私の恋は、ますます揺れて叶いそうもないのに、私の心から消えないあの人の面影なのでした。)

岩崎純一

白妙の身にしむ色の袖の風にかへすがへすも消ゆることのは 四

(身に染みるような色の風が、私の袖を幾度も吹き返しています。その風の中に本当に本当に消えてゆく、優しかったあなたの言葉なのでした。)

【判】

一首目、「はらふ手だてはいたづらに」は、ありそうでない流麗な言葉です。二首目、祐子内親王家紀伊の「かげろふの灰見し人の恋しさ」に似る情趣です。三首目、定家の歌をいっそう圧縮した上句の共感覚が、悲恋をひとしお清廉にしています。